

健康文化

わが闘病記（その4）

岡島 俊三

昭和15年の元旦をサナトリウムで迎えた。この年は皇紀2600年と称して喧伝され、『紀元は2600年』という歌が歌われた。

金鵝輝く日本の栄えある光身に受けて
いまこそ祝えこの朝 紀元は2600年
ああ 一億の胸はなる

ひそかに煙草の値上げを風刺した次のような替え歌も歌われた。

金鵝上がって15銭 栄えある光30銭 鵬翼高い50銭 紀元は2600年
ああ一億は泣いている

まだ庶民の間に心の余裕が感じられた。この年は東京オリンピックが開催される予定で準備が進められていたが、戦局は厳しく返上のやむなきに至った。もともとヨーロッパでも第2次世界大戦が勃発してオリンピックどころではなくなっていた。

元旦の朝食にはお雑煮が供せられた。白味噌仕立てで丸い小餅を湯煮して、やつがしら、大根、焼豆腐などが入ったものである。ところが変われば雑煮も変わることを発見した。

お正月は皆おそろしく元気を出して、トランプに打興じたが、根箭、夫馬両君が喀血してしょげてしまった。

正月早々降雪があつて、蒲生平野は銀世界となり、素晴らしい眺めを楽しむことが出来た。そんな寒い日でも、結核治療の鉄則で新鮮な空気を吸うべく、病室の一方の窓は解放されていた。勿論、身体は冷えないように湯タンポは入っていたが、幸に風邪をひくようなこともなく病状は快方に向かいつつあった。

正月早々原田牧師のすすめで、バルトのロマ書の研究会がひらかれることになり、これに参加することになる。

1月10日は誕生日で満20歳を迎えることとなった。その寸前に、毎月1回恒例の阪大の内科の清野教授の回診があり、左の肋骨の一部が少しふくれている

のが発見され、肋骨カリエスの疑いがあるので外科を受診するようと、名大病院の斉藤教授への紹介状を書いて渡された。全くの晴天の霹靂であった。

11日、真白な雪に包まれたサナトリウムを後に、夏洋服に無オーバーの悄然たる姿で近江八幡駅からわが家へ帰った。

翌日直ちに兄に伴われて、名大病院の斉藤教授の診察を受けた。開けてみなければ確かなことはわからないが、肋骨カリエスだろうという診断で、とにかく入院して手術を受けるようにとの言葉、何か恐ろしいような、また仕方がないと諦めたような妙な気持で帰宅した。

翌々日、よく知っている近くの洋々医館の須磨博士の診察を受けたところ、全く同様の診断であり、家からの便利を考えて、ここに入院することに決めた。直ちに入院し、検査等で不安な数日を過ごし、21日の手術の日が訪れた。非常に寒い日、手術台に上がった。手術は局所麻酔で行われた。切開して見て肋骨の部分は冒されておらず、肋骨軟部組織結核という診断で、肋骨は切除することなく、周囲の病巣部を取り除くだけで、無事手術は完了した。しかしその夜から2、3日は絶対安静で寝返りもできないということで苦痛を感じたが、経過は順調でめきめき回復し、2月12日には退院することができた。

サナトリウムに再入院の申し込みをしたが、満室で待たされ、3月6日にやっと許可されて再入院。取り敢えず本館2階の共同室に入った。騒々しくて落ち着かないので転室を希望し、1週間後に平和館というちょっと離れた病棟の個室に移った。

3月でも雪が降って、あたりが銀世界になったこともあったが、やはり春の光に包まれて快い季節を迎えた。

毎日、前に入院していた新生館から友人の鈴木氏、深尾君らが訪れてくれて雑談を楽しんだ。この頃、サナトリウムの創設者のヴォーリズ氏と親交のあった賀川豊彦氏や沖野岩三郎氏が来訪されてお話を聞く機会があった。話の大事な筋など記憶にないが、沖野氏が食事は腹八分目がよいというのが原則であるが、胃の腑も身体も訓練が必要である。1週間に1回くらいは思い切って食べる。時々強行軍することもあながち悪くないと、いたずらっぽく言われたことが妙に頭に残っている。

3月の終わりころ、級友の鈴木光彦君が名古屋からわざわざ見舞に来てくれた。彼はほとんど毎週手紙をくれて励まされてきたが、久しぶりの面会で話しの尽きることはなかった。続いて1年下級生の岡田悦二君が九州旅行の途次見舞に訪れてくれた。

4月になると一面に桜が開花し、花の下で写真を撮ったり、散歩の足を延ばし

たり楽しい日々を過ごすようになる。病状も快方に向かい元気も出てきて、釣りにも出掛けるようになる。

蒲生平野にはクリークというか、幅10メートルくらいの小川が近くにあって、売店で釣道具一式を買い、サシを餌に糸を垂れると、10センチくらいの鮠（はや）がかかる。のどかな春の陽をうけて、のんびり釣りを楽しむなど、忘れえぬ思い出である。釣った魚を食堂へ持っていくと、コック長の永原さんが料理して食事に添えてくれた。

その頃行われた野火の壮観、春の夕空を真赤にこがし、めらめらとなめ渡る、あの雄大な光景を見る機会に恵まれた。

またこの頃、西国33ヶ所の31番目の札所である長命寺が近くにあるので、白衣に身を包んだお遍路さんの姿も懐かしく思い出される。

4月の中旬になって、前にいた新生館2階の鈴木五郎氏が退院されるということで、送別会が開かれた。久しぶりに腹を抱えて笑うようなことが数々あって、楽しい一夜を過ごした。

もといいた新生館に空室ができたので、そこに転室することになり、中学生の深尾君と同室することになった。まわりは顔馴染みの者ばかりで気安い日々が訪れた。

病状が安定し徐々に快方に向かうにつれて、健康回復後への希望ももてるようになってきた。そうすると、これからの人生を如何に生きてゆくか真剣に再検討する必要に迫られた。再び病気を繰り返すようなことのないように体を労わりながら、自分の性格は何に向いているのか、自分の能力で何ができるのかを考慮して、悔いのない人生の再出発をしようと考えようになった。

これまでの自分を反省してみると、出世やお金に人並みの関心があり、競争原理の支配する社会で、「勝つことは成功であり、いいことだ」と信じて、ひたすら階段を駆け登ろうとしていた。名古屋高等工業学校の電気科で学び、エンジニアを目指して勉強中であった。その道が嫌な訳ではなかったが、何か別に適した道があるように思えて仕方がなかった。エンジニアになるより、研究者、しかも、なるべく基礎的な研究に何となく憧れを抱くようになった。

たまたまユングの人間の八つのタイプと職業についての次のような表（表1）のあることを見つけた。

自分にあてはめてみると、ものを読んだり考えたりすることは好きで、非社交的な性格であるし、思考型の内向型に属しているようで、そうすると職業として、たとえば哲学者、科学者向きということになる。確かに哲学とか科学の中でも、基礎的な分野、たとえば数学、物理学、天文学などの研究には大変興味

がある。

さて、哲学は人生、世界、事物の根元の原理を究めようとする学問として、すべての学問の上に位し、哲学者も全ての人間の上に位するような感じが何となくする。当時哲学書を読んで少し気のきいたことをいうのが青年としての存在証明のような風潮があった。それでその頃の青年の必読書とされていた哲学書をかなり読んでみた。

何か権威を誇示するかのよう書かれた文章は難解で理解できず、しばしば情けない思いをした。人生に対する懐疑が原因で文科に転向し、一生思考を続けても結論が出そうにない分野に踏み込むことには勇気がいるし、躊躇せざるをえなかった。

数学には興味はあったのだが、脳の中でのみの抽象的思考というのはやはり肌合わないような感じがする。

自然科学は主観とは一線を画した正確な客観的な知識の集積である。正確と言うのは天気の様様によって変わったり、気分次第で動いたりはない。しかしこのような性格は妥協を許さず、融通のきかないもので、そこに科学の信頼性がある。

20世紀の最大の天才科学者アインシュタインにあやかって特に物理学に取りつかれた。相対性理論のもつ妖しい魅力と量子力学特有の難しそうな概念にとりつかれて、よく分からないままに強く物理学に憧れを覚えるようになった。物理学の魅力は何とんでも多種多様な自然現象を感動的なまでに簡単かつ美しい基本法則で完璧に説明してしまう明確さにある。

天文学は物理学の一分野として宇宙の神秘を探る魅力的な部門であるが、どうしても夜間の観測作業は避けられそうになく、健康面でやはり敬遠した方がよさそうに思われた。現にサナトリウムに東大と京大の天文学者が2名入院中であった。

さて物理学を本格的に勉強するにはどうしても当時の帝大理学部に進学して基礎的な修練を積まなければならないが、大学に進学するには旧制の高等学校を卒業するのが正規の道である。高等工業学校の3年途中まできて、またやり

表1 人の性格と職業 (ユングによる)

性 格		職 業
思考型	外向型	法律家 役人 エンジニア
	内向型	哲学者 科学者
感情型	外向型	俳優 タレント 広告宣伝
	内向型	宗教家 芸術家
感覚型	外向型	ビジネスマン
	内向型	芸術家
直感型	外向型	ファッションデザイナー
	内向型	独創的芸術家 教祖

直すのは大変であるが、ここに一つの道がある。一応高等工業学校を卒業すれば、全国の帝大の理学部の物理学科で毎年数名程度は試験によって入学を許可される、いわゆる傍系入学という道が開かれている。これは難関で厳しい狭い門であるが、現実的な道である。できればこの方法に挑戦してみたいと決心した。

5月になって、親睦会、ピンポン大会などがあり、新緑に包まれた野山をセルの着物で身軽にあちこち散歩できるようになった。

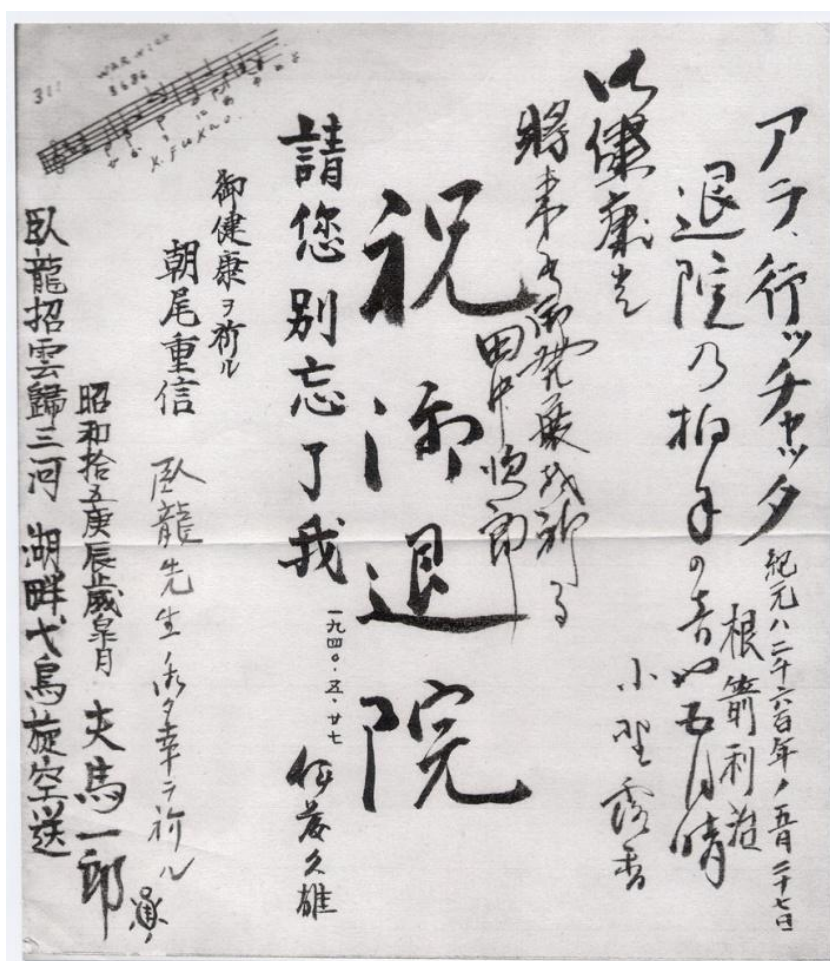
5月下旬、栗本院長から退院の許可を得たのであった。早速、送別会を開いていただき、記念に寄書と、阿部次郎の『秋窓記』を贈られた。

友達の拍手に送られて、思い出の多いサナトリウムにお別れした。近江八幡駅まで同室であった深尾君が送ってくれた。

名古屋駅のホームには、級友の鈴木光彦君が出迎えてくれた。

夕方、懐かしい我が家へやっと着く。

家族に喜んで迎えてもらったが、愛犬「ピー」は最高の喜びの表現で迎えてくれた。



退院記念の寄書

(長崎大学名誉教授)